

海外語学研修・短期語学留学による英語運用能力の変化

野中 辰也・関 久美子

Change in English Proficiency through a Homestay Program and a Short-term Study Abroad Program

Tatsuya Nonaka, Kumiko Seki

1. はじめに

新潟青陵大学短期大学部人間総合学科では、主に英語を学ぶ学生を対象として3週間の海外語学研修（以下「語学研修」）と3ヶ月ないし6ヶ月の海外短期留学（以下「短期留学」）を実施してきている。いずれも参加学生の英語力向上を主目的としており、前者では研修にそれぞれ半年の事前指導・事後指導を含めた通年科目としており、後者では留学先で履修した科目を本学の科目へと読み替えている。語学研修については野中（2005, 2008）で、短期留学については野中ほか（2001, 2002）と関ほか（2009）でそれぞれ効果測定を報告してきた。

先行研究の一つである野中（2005）では、アメリカでのホームステイ形式での3週間の語学研修を経験した短大1年生51名を対象として、研修前後の英語運用能力の変化を測定した。英語力標準テスト ITP Pre-TOEFL¹⁾を用いた測定により、研修参加前後で参加者全体の総合的な英語運用能力の上昇は確認できなかった。しかしながら、特にPre-TOEFLの総合スコアが350点以下といった英語運用能力レベルが低めの参加者については、リーディング力と総合的な英語運用能力の上昇が確認できた。さらに、参加者の英語運用能力に関わらず、個人差が大きい部分もあり、参加者によっては、研修前比20%超といったスコア伸び率を示す例も少なくなかった。

短期ではあっても海外での集中した英語のexposureが英語力の上昇に寄与するはずという一般的な予想に反した上記結果を受けて、後続研究として行った野中（2008）では、短大1年生29名を対象として、新たにTOEIC IP（IP = Institutional Program: 特別団体受験制度）を用いて効果測定を行なった。結果、研修参加後、参加者全体のTOEIC IPスコアの上昇が見られ、統計的に有意差ありと確認された。下位項目については、リスニングパートの得点上昇が確認された一方で、リーディングパートの有意な得点変化は確認できなかった。さらに、研修前のTOEIC IPスコアが460点以上といった英語運用能力レベルが高めの研修参加者については、統計的に有意差ありとされる得点変化は、いずれの項目でも見られなかった一方で、研修前のTOEIC IPスコアが350点以下といった英語運用能力レベルが低めの研修参加者については、統計的に有意差ありとされるような得点上昇が、総合スコアとリスニングパートで確認できた。

さらに、関ほか（2009）では6ヶ月留学派遣生16名と3ヶ月留学派遣生6名を対象として、TOEIC IPを用いて効果測定を行なった。結果、留学前後で、参加者全体としてはTOEIC IP総合スコアの上昇が見られ統計的に有意差ありと確認された。特に6ヶ月留学派遣生については、総合スコアに加えて、下位項目であるリスニングパート、リーディングパートのいずれについても有意な得点上昇が確認された。しかしながら、3ヶ月留学派遣生については、総合スコア、下位項目であるリスニングパート、リーディングパートのいずれについても有意な得点差は見られなかった。個々の派遣生を見た場合、6ヶ月留学派遣生は多くが留学前後でスコアを大幅に伸ばしたのに対し、3ヶ月留学派遣生はスコアに変化のないあるいは下がったケースが多い傾向にあった。

本稿では、一連の効果測定研究に引き続き、野中（2008）で報告した手順にそれ以降のデータを盛り込み、延べ11年間にわたるデータ蓄積のもと、英語運用能力養成に効果をもたらすexposureの量について実証的根拠を示すこととする。

2. 語学研修・短期留学概要

2.1. 位置付け

本語学研修は、短大の人間総合学科在学生のうち英語科目を主に履修している1年生（履修科目全体のうちの6～7割程度が英語科目）を対象としており、約3週間のホームステイを通しての英語運用能力伸長と異文化理解を目的としている。研修は「海外語学研修」という通年授業科目として、それぞれ6ヶ月間の事前・事後指導を含んでいる。事前指導は野中（2012）にまとめたとおり、研修での複数回のプレゼンテーションや社会見学先での質疑応答の準備に費やし、事後指導は研修結果をホームページにまとめる作業に費やしている。²⁾

一方、短期留学は上記人間総合学科の1年生なし2年生を対象とし、3ヶ月ないし6ヶ月の期間ホームステイをしながら、本学の姉妹校の米国ワシントン州のGreen River College（以下「GRC」）の英語集中プログラムにおいて集中的に英語の学習を行なう。実際に留学する学生はほとんど1年生で、2年生の参加は過去15年間で若干名である。留学派遣生には、留学先での授業科目を本学の授業科目に読み替えて卒業単位として認定している。派遣生には事前指導として2ヶ月程度をかけて異文化理解ほかのオリエンテーションを実施し、留学から帰国後は事後指導として留学結果をホームページにまとめる作業を課している。

2.2. 語学研修・短期留学先、期間、内容

語学研修の研修先はアメリカ・ワシントン州のシアトル郊外で、研修期間は短大1年次末の20日間。研修参加者は、20日間のうち、平日13日間は現地スタッフのもとで英会話授業（午前中）や見学（午後・終日）を行ない、それ以外の時間帯は個別に1家庭にホームステイをし、さまざまな活動を行なう。授業科目であるということもあり、日中の授業や見学の際には、日本人間同士を含めて英語のみで生活するように引率教員からの指導がなされている。そのため、中学校・高等学校ほかでの異文化理解を主目的としたホームステイプログラムと比べて、参加者が積極的に英語を使用する機会は多く、動機付けも高くなっていると考えられる。

短期留学の留学先は米国ワシントン州のGRCで、留学派遣生は3ヶ月留学では秋学期、6ヶ月留学では秋学期に加えて冬学期にGRCの英語集中課程に在籍することになる。集中課程での1クラスは最大15名程度で、秋学期開始時のオリエンテーション中のプレイスメント・テストの結果により5つのレ

ベルにクラス分けされ、週5日間、授業は午後から50分授業が1回、75分授業が2回行われ、会話、聴解、文法、読解、作文の技能を身につける。本学からの留学派遣生はレベル2ないし3に配当されることがほとんどである。留学派遣生は留学中、様々な国からの留学生とともに、授業内外で活動をともにし、滞在先のホストファミリー宅でも日常言語として英語を使うこととなる。

2.3. 語学研修・短期留学実施状況

本学での語学研修・短期留学プログラムはいずれも15年以上の実績があり、今回調査対象とした2004年度から2014年度の語学研修・短期留学に参加した短大1年生は、下表のとおり、語学研修87名、6ヶ月短期留学27名、3ヶ月留学11名である。

表1：語学研修・短期留学参加者数（短大1年生）

年度	語学研修	6ヶ月留学	3ヶ月留学	年度	語学研修	6ヶ月留学	3ヶ月留学
2004	9	6	1	2010	0	1	3
2005	11	4	2	2011	14	0	2
2006	11	4	0	2012	6	4	1
2007	5	2	0	2013	6	2	0
2008	9	2	1	2014	6	3	0
2009	10	0	0	計	87	27	11

語学研修・短期留学参加者は短大で英語科目を中心に履修しているが、それぞれのプログラム参加前の英語運用能力はhigher elementaryからlower intermediateのレベルであると考えられる。プログラム参加にあたっては、その要件として実用英語技能検定の準2級取得を課しており、研修参加以前にはほぼ全員が準2級資格を取得済みで、同検定の2級資格を取得済みの学生も若干名いた。さらに、プログラム参加前の英語運用能力をTOEIC IPテストで測定したところ、語学研修参加者で平均点383.9、最高点630、最低点195、標準偏差85.1、6ヶ月留学派遣生で平均点363.7、最高点460、最低点265、標準偏差47.6、3ヶ月留学派遣生で平均点352.7、最高点440、最低点240、標準偏差55.3、という結果を得た。語学研修参加者の得点が高いのは、留学派遣生の事前テストの時期が留学3ヶ月前の1年次6月であるのに対し、語学研修参加者の事前テストの時期が研修直前の1年次2月であり、事前テストまでの英語学習歴の長短によるものと考えられる。

3. 語学研修・短期留学の効果測定

3.1. 調査対象者

本研究は、効果測定としてTOEIC IPを利用し始めた2004年度から、直近にプログラムを修了した2014年度までの延べ11年間における語学研修参加者85名、6ヶ月短期留学派遣生27名、3ヶ月留学派遣生11名を調査対象とする。語学研修参加者については、研修前後2回のTOEIC IPを受けることができなかった2名を除いてある。

3.2. TOEIC IP受験回数と受験時期

2004年度の語学研修・短期留学より、プログラム参加による英語運用能力の変化を測定するテストとしてTOEIC IPを利用している。語学研修参加者は、研修開始直前1週間前後に1回、研修終了約1ヶ月後に1回のテストを受けている。短期留学派遣生は、留学開始3ヶ月前に選抜テストとして1回、6ヶ

月留学派遣生は留学終了約1ヵ月後、3ヶ月留学派遣生は約2ヵ月後に1回のテストを受けている。こうして、いずれの調査対象者も2回のテストを受けている。

3.3. 結果分析方法

語学研修・短期留学参加者の英語運用能力変化を客観的に測定するため、語学研修・短期留学開始前と終了後ほぼ1ヶ月の時点でそれぞれ英語運用能力テスト（TOEIC IP）を実施した。テスト結果をもとに、TOEIC IPの「総合スコア」および「リスニング」「リーディング」各セクションのスコアの変化をt検定により、それぞれ比較検討した。

さらに語学研修参加者については、野中（2008）と同様に、研修前後でのスコアの変化を研修前の成績上位群（20名＝TOEIC IP総合スコア450点以上、以下「上位群」）と同下位群（20名＝TOEIC IP総合スコア320点以下、以下「下位群」）で比較検討した。その後、同様の比較検討を6ヶ月留学派遣生について留学前の成績上位群（9名＝TOEIC IP総合スコア390点以上）と同下位群（9名＝TOEIC IP総合スコア340点以下）で比較検討した。なお、3ヶ月留学派遣生については、人数が少ないため、この分析からは省いた。

最後にこれも野中（2008）に倣い、特に先述の語学研修参加者の上位群と下位群を対象に、研修前後での成績の伸び率を検討した。

4. 結果と考察

4.1. プログラムごとの効果

表2は、語学研修・短期留学参加者のプログラム参加前後でのTOEIC IPスコアの変化をまとめたものである。

表2：TOEIC IPスコアの変化

		リスニング		リーディング		総合スコア	
		参加前	参加後	参加前	参加後	参加前	参加後
語学研修 参加者 (N=85)	平均点	231.5	250.2	152.4	153.9	383.9	404.1
	最高点	330	345	305	320	630	600
	最低点	110	150	70	85	195	240
	標準偏差	53.1	46.6	44.8	43.3	85.1	75.9
6ヶ月 派遣生 (N=27)	平均点	224.8	309.3	138.9	183.3	363.7	492.6
	最高点	290	400	200	265	460	625
	最低点	160	235	85	120	265	395
	標準偏差	35.9	44.2	26.2	37.0	47.6	68.8
3ヶ月 派遣生 (N=11)	平均点	220.0	279.1	132.7	154.1	352.7	433.2
	最高点	275	335	180	230	440	565
	最低点	125	190	85	105	240	295
	標準偏差	42.4	46.8	29.4	39.4	55.3	77.1

表内のデータを順に見ていくと、まず総合スコアの得点変化にプログラムごとの違いが見て取れる。総合スコアはいずれのプログラムでも上昇（語学研修：+20.2、6ヶ月留学：+128.9、3ヶ月留学：+80.5）が見られ、それぞれ有意差ありという結果を得た（いずれも両側検定で、語学研修： $t(84)=2.809$ 、 $p<.01$ 、6ヶ月留学： $t(26)=11.671$ 、 $p<.01$ 、3ヶ月留学： $t(10)=4.047$ 、 $p<.01$ ）。このことからいずれもプログラムも英語力向上に効果ありと判断できるが、語学研修でのスコア伸長は約20点にとどまってい

る一方で、短期留学でのスコア伸長は、6ヶ月で約130点、3ヶ月で80点ほどとなっており、その効果がより顕著であると言える。

次にリスニングパートの変化を見ると、これもいずれのプログラムでも上昇（語学研修：+18.8、6ヶ月留学：+84.4、3ヶ月留学：+59.1）が見られ、それぞれ有意差ありという結果を得た（いずれも両側検定で、語学研修： $t(84)=3.400$ 、 $p<.01$ 、6ヶ月留学： $t(26)=10.676$ 、 $p<.01$ 、3ヶ月留学： $t(10)=3.441$ 、 $p<.01$ ）。リスニングにおいても、在米期間の長さに応じて、効果が顕著に現れていることがわかる。ただし、3ヶ月留学でリスニングの得点上昇に有意差ありという結果は先行研究である関ほか（2009）とは異なるものである。同研究では調査対象となった3ヶ月派遣生の数が今回の約半分の6名であり、調査対象者数がほぼ倍増したことで、調査者の直観に沿ったより一般的な結果となったのではないかと推察される。

一方、リーディングパートの変化であるが、いずれのプログラムでも上昇（語学研修：+15.5、6ヶ月留学：+44.4、3ヶ月留学：+21.4）が見られはしたが、有意差ありという結果を得たのは6ヶ月留学のみであった（両側検定： $t(26)=5.724$ 、 $p<.01$ ）。この結果は先行研究である野中（2008）および関ほか（2009）と一致するもので、リーディング能力に有意差のある変化をもたらすには、短期の語学研修や3ヶ月程度の短期留学程度では不十分であるといえよう。

ここまでの結果は、いずれも調査者の直観と相容れるものである。短期とはいえ英語圏での実際の生活を通してリスニング力は総合スコアにまで影響を与える程度まで比較的容易に養成されるのに対して、リーディング力の養成には現地でも半年程度の学習期間が必要であると考えられえ。

4.2. 事前英語運用能力別傾向

4.2.1. 語学研修参加者

表3は、語学研修参加者85名のうち、研修前のTOEIC IP総合スコアの上位群と下位群のデータを、表2にならってまとめたものである。

表3：TOEIC IPスコア変化研修前成績別（語学研修）

		リスニング		リーディング		総合スコア	
		参加前	参加後	参加前	参加後	参加前	参加後
研修前 総合スコア 上位群 (N=20)	平均点	294.0	290.3	211.3	198.8	505.3	489.0
	最高点	330	345	305	320	630	600
	最低点	245	220	160	140	460	415
	標準偏差	22.4	34.0	32.7	42.2	39.1	57.0
研修前 総合スコア 下位群 (N=20)	平均点	162.8	222.0	117.8	137.5	280.5	359.5
	最高点	220	325	155	190	320	460
	最低点	110	150	75	85	195	265
	標準偏差	32.7	42.0	22.1	30.0	35.6	55.3

表内のデータについて、上位群ではいずれの項目も平均点について有意差が確認されなかったのに対し、下位群ではそれぞれのスコアについて有意な上昇が確認され、総合スコアで+79.0（両側検定： $t(19)=5.970$ 、 $p<.01$ ）、リスニングで+59.3（両側検定： $t(19)=6.125$ 、 $p<.01$ ）、リーディングで+19.8（両側検定： $t(19)=2.484$ 、 $p<.05$ ）のポイント上昇が見られた。

研修の効果は上位群よりも下位群に顕著に見て取れるという結果は、野中（2005, 2008）でも確認されている。今回も引き続き同様の結果を得たことにより、語学研修は英語運用能力が低めの参加者には十分な効果があると考えてもよいであろう。実際、下位群20名のうち、例えば総合スコアの上昇が見ら

れなかったのは2名のみで、得点上昇率で見ると最大72%アップという結果を得た参加者も見受けられた。

その一方で、上位群の結果は前回以上に調査者の予想を裏切るものであった。野中（2008）でも上位群には得点が上がった参加者と下がった参加者がほぼ半数ずついるということが見て取れたが、今回は、有意差はないとは言え、素点で見ると、上記いずれの項目でも得点を下げた参加者が全体の3分の2を占めるといった驚きの結果となった。この結果の説明としては野中（2008）と同様、今回上位群に分類したレベルの参加者は、20日間程度のホームステイに必要なレベルのリスニング力やリーディング力には事前に到達しており、研修によって大幅に変化するようなレベルではなかった、あるいは研修参加自体を目標にしてきた参加者が上位群には多く、そうした参加者は研修参加自体で燃え尽きてしまい、研修終了後1ヶ月を経ての事後テストの段階では、テスト受験に対する動機付けが低くなってしまったのかもしれないといったことも考えられる。事実、短期留学派遣生が帰国後も英語の検定試験に積極的に取り組むのに対して、語学研修参加者にはそうした傾向があまり見られないといったことを考え合わせると、研修参加自体が最終到達目標となっている参加者が多く見られるのが、上位群の特徴といえるかもしれない。

4.2.2.6 6ヶ月留学参加者

それでは、留学派遣生について事前の英語能力の差で結果に違いが現れるかを検討したい。ここでは11年間で27名という比較に十分な人数がいる6ヶ月留学派遣生を対象として、留学前のTOEIC IP総合スコアの上位群と下位群のデータを、表3にならってまとめたものである。

表4：TOEIC IPスコア変化留学前成績別（6ヶ月留学）

		リスニング		リーディング		総合スコア	
		参加前	参加後	参加前	参加後	参加前	参加後
留学前 総合スコア 上位群 (N=9)	平均点	262.8	345.0	153.3	195.0	416.1	540.0
	最高点	290	400	190	265	460	625
	最低点	215	270	130	140	390	410
	標準偏差	23.0	42.4	18.3	36.4	24.4	64.9
留学前 総合スコア 下位群 (N=9)	平均点	191.1	280.6	120.6	170.0	311.7	450.6
	最高点	220	320	155	225	340	545
	最低点	160	255	85	120	265	395
	標準偏差	18.4	19.9	21.7	34.2	24.0	44.1

表内のデータについて、上位群、下位群ともにそれぞれのスコアについて有意な上昇が確認された。上位群では、総合スコアで+123.9（両側検定： $t(8)=5.372$ 、 $p<.01$ ）、リスニングで+82.2（両側検定： $t(8)=4.551$ 、 $p<.01$ ）、リーディングで+41.7（両側検定： $t(8)=3.248$ 、 $p<.05$ ）のポイント上昇が見られ、下位群でも、総合スコアで+138.9（両側検定： $t(8)=12.163$ 、 $p<.01$ ）、リスニングで+89.4（両側検定： $t(8)=9.398$ 、 $p<.01$ ）、リーディングで+49.4（両側検定： $t(8)=4.954$ 、 $p<.01$ ）のポイント上昇が見られた。この結果から、短期留学は派遣生の事前の英語運用能力の高低によらず一定の効果があるといえるようである。また、素点で見ると、成績の上昇率も下位群の方が若干高めであるため、語学研修同様、海外での集中的な英語のexposureは下位群に顕著に現れると推察される。ただし、今回の調査対象者である留学派遣生の事前の英語力はTOEIC IPのスコアで最高460点、全体の約8割は400点以下ということから、先述の語学研修参加者の参加者の結果と単純な比較はできないかもしれない。

4.3. 語学研修後の英語運用能力上昇率

表5は、特に語学研修参加者について野中（2008）に倣い、表2、表3で確認された結果を別の切り口で表示したもので、研修参加前後でのTOEIC IPスコア伸び率をパーセントで示したものである。マイナスがついた数値は、研修後のスコアが下がったことを示している。

表5：語学研修参加者TOEIC IPスコア伸び率（%）

		リスニング	リーディング	総合スコア
全体 (N=85)	平均値	12.4	4.6	7.8
	最高値	96.0	76.5	72.0
	最低値	-41.1	-45.2	-28.2
	標準偏差	27.3	26.4	20.5
研修前 総合スコア 上位群 (N=20)	平均値	-0.7	-4.8	-2.8
	最高値	30.2	36.2	26.6
	最低値	-25.4	-31.7	-23.9
	標準偏差	14.3	19.7	12.9
研修前 総合スコア 下位群 (N=20)	平均値	40.1	20.5	29.8
	最高値	96.0	73.3	72.0
	最低値	-11.1	-45.2	-9.4
	標準偏差	30.5	30.7	23.0

この表からは、参加者全体の「総合スコア」の平均点上昇率7.8%、「リスニング」パートの平均点上昇率12.4%、「リーディング」パートの平均点上昇率4.6%が見て取れる一方で、上位群ではいずれの項目もマイナスの数値が、さらに下位群では「総合スコア」で29.8%、「リスニング」で40.1%、「リスニング」で40.1%といった大幅な得点上昇が見て取れる。

さらに表5にまとめた元データを度数分布グラフにしたのが図1～図3である。

各図から見て取れるとおり、上位群の伸び率が軒並みマイナス位置を中心に分布しているのに対し、下位群の伸び率はプラス位置を中心に分布していることがわかる。野中（2008）でも考察したように、こうした下位群の健闘は、日本での日頃の学習環境では英語を話す・聞くという活動になかなか積極的に参加できないというレベルの学

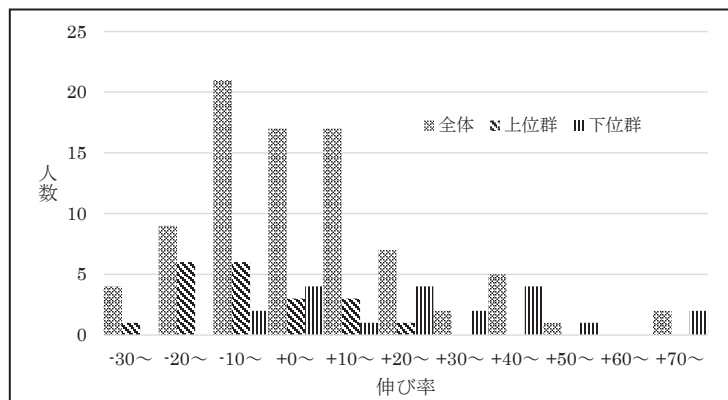


図1：語学研修参加者TOEIC IP総合スコア伸び率分布（%）

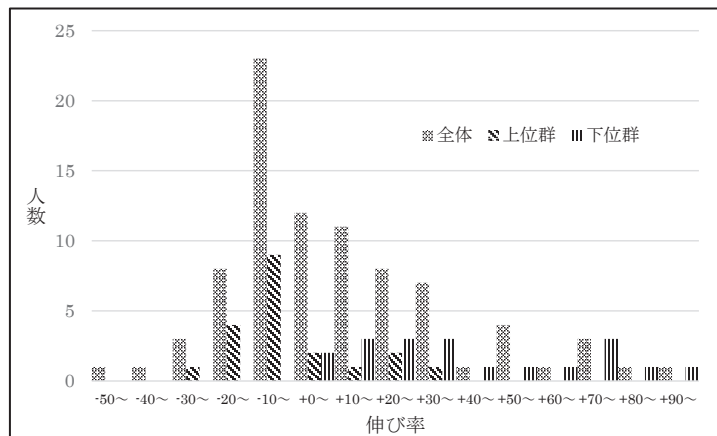


図2：語学研修参加者TOEIC IPリスニングスコア伸び率分布（%）

習者が、積極的に話しかけてくれるホストファミリーに囲まれて、充分な量のexposureを受け、自らも積極的に英語を使用する機会に恵まれたのが理由ではないかと推察される。

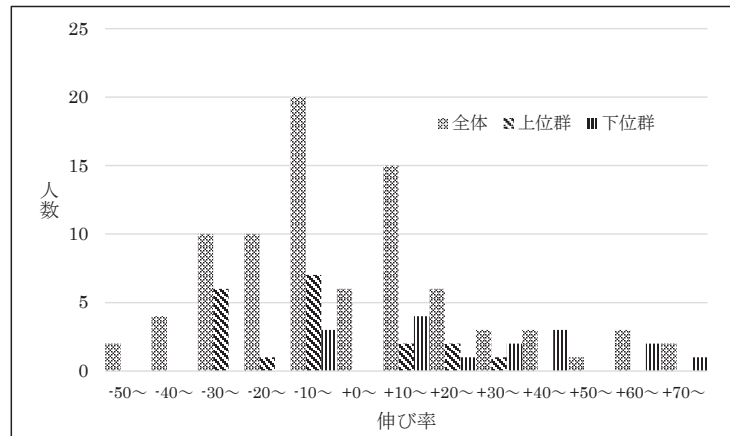


図3: 語学研修参加者TOEIC IPリーディングスコア伸び率分布(%)

5. おわりに

本研究では、短大で実施している海外語学研修および短期語学留学参加者を対象として、その英語運用能力伸長についての効果測定を行なった。今回の効果測定の結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 語学研修、短期留学いずれの参加者においても、プログラム参加後にTOEIC IPスコアの上昇が見られ、統計的に有意差ありと確認された。下位項目については、いずれのプログラム参加者についてもリスニングパートの有意差のある得点上昇が確認された一方で、リーディングパートの有意差のある得点上昇は6ヶ月留学派遣生のみでしか確認されなかった。
- 2) 特に語学研修参加者について、TOEIC IPスコアが450点以上といった英語運用能力レベルが高めの研修参加者については、統計的に有意差ありとされるような得点変化は、いずれの項目にも見られなかった一方で、同スコアが320点以下といった英語運用能力レベルが低めの研修参加者については、統計的に有意差ありとされるような得点上昇が、総合スコアとリスニングパート、リーディングパートのそれぞれで確認できた。
- 3) 同じく6ヶ月留学派遣生についてTOEIC IPスコアが390点以上といった英語運用能力レベルが高めの派遣生と同スコアが340点以下といった英語運用能力レベルが低めの派遣生を見た場合、いずれのグループについても、統計的に有意差ありとされるような得点上昇が、総合スコアとリスニングパート、リーディングパートのそれぞれで確認できた。

先行研究である野中(2008)と今回の結果を併せて、英語運用能力の上昇が期待できるexposureの「量」については一定の示唆を得ることができたのではないかと考える。残念ながら、これまでの一連の研究はリスニング、リーディングの能力のみを測定するものであり、海外滞在で期待されるスピーキングやライティングの能力については測定されていない。さらに、プログラム参加者の英語運用能力以外の認知的・心理的側面やプログラムに参加したことの波及効果についても検討の余地は十分あると考えられる。今後はそうした面での測定・検討も含めて、研究を継続していきたい。

注

1) ITP = Institutional Testing Program。このテストは、英語を母語としない者の英語運用能力を測ることを目的としたTOEFL(=Test of English as a Foreign Language)の問題から編集された、ミニTOEFLともいえる標準化されたテストである。テストは3つのセクションからなり、Section 1はリスニング能力、Section 2は文法構造や語法の能力、Section 3は語彙およびリーディングの能力を測る。各セクションのスコアは50点だが、総合点は500点がそれぞれ上限となっている。

2) 下記URLで語学研修と短期留学について参照できる：

語学研修概要：<http://www.n-seiryu.ac.jp/~nonaka/hs2015/>

語学研修学生レポート：<http://www.n-seiryu.ac.jp/~nonaka/hs15/>

短期留学学生レポート：<http://www.n-seiryu.ac.jp/~nonaka/sap/>

引用文献

野中辰也. 2005.「海外語学研修の効果測定」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第35号, pp. 7-12.

_____. 2008.「海外語学研修の効果測定(2)」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第38号, pp. 43-49.

_____. 2012.「海外語学研修指導の実際」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第42号, pp. 9-15.

野中辰也、田中ゆき子、隅田朗彦. 2001.「短期語学留学プログラムの効果測定(1)」『新潟青陵女子短期大学研究報告』第31号, pp.71-78.

_____. 2002.「短期語学留学プログラムの効果測定(2)」『新潟青陵女子短期大学研究報告』第32号, pp.33-38.

関久美子、野中辰也、隅田朗彦. 2009.「短期語学留学プログラムの効果測定(3)」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第39号, pp.105-113.